

試合出場時間が生徒の運動有能感に与える影響について

～高校サッカー部と野球部に着目して～

福島 成 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究の目的は、生徒の生活の大きな部分を占める運動部活動を通して、生徒が豊かなスポーツ実践を行うために、試合出場時間と運動有能感の関係を検討し、今後の効果的な部活動の在り方を提案することである。

2. 研究方法

- 1) 対象者 K 高校サッカー部の生徒 185 名、O 高校野球部の生徒 88 名、及び両校の顧問であった。
- 2) 調査方法 運動有能感に関しては、岡澤ら(1996)によって作成された運動有能感測定尺度(3 因子各 4 項目、12 項目)を用いて測定した。それに加えて、部活動の満足度とその回答の理由を自由記述で調査した。また、顧問を対象に所属カテゴリーと試合出場時間を調査した。
- 3) 分析方法 SPSS24.0 で因子分析を行い、運動有能感と試合出場時間の平均値に対応して t 検定を実施した。有意水準は 5%未満とした。

3. 結果と考察

本研究において、野球では、身体的有能さの認知や、受容感において、所属カテゴリーが高い生徒の方が低い生徒よりも得点が高かった(右図 A からカテゴリー高群、4 段階)。サッカーでは、身体的有能さの認知では、有意差が見られたものの、野球ほど顕著ではなく、受容感、統制感においては、有意差はみられなかった(右図 A からカテゴリー高群、3 段階)。

サッカーでは、ほとんどの生徒が試合に出場可能な環境が整っており、試合に出場する選手の入れ替わりも多いことがこの結果の要因として考えられる。また、部活動の満足度に関する自由記述欄にも試合に出場できないなどの不満の声はみられず、サッカーが楽しいといった声が多かった。

野球では、試合に出場できないことで、周りからの

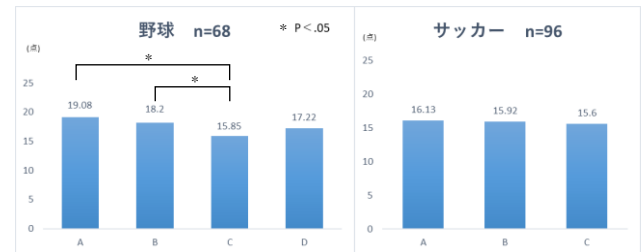


図 カテゴリーごとの受容感の比較

高い評価を受けることが少なくなり、自分の能力を低く感じたり、仲間から認められていないと思ったりしてしまうことがこの結果につながったと考えられる。また、試合に出場する選手が固定化する傾向(O 高校では前回の地方大会で出場した生徒は 13 名)があり、下位のカテゴリーでは、自分は部に必要な存在ではないと感じていることも推察される。

4. 結論

本研究では、多くの生徒が試合に出場する機会があることで、部員全員の運動有能感を高めることができるという示唆が得られた。また、試合に出場する機会を増やすことは難しい場合でも、緊張感のある試合を経験したり、頻繁にカテゴリー編成を行ったりすることで生徒の運動有能感を高められるのではないかと考えられる。

5. 主な参考文献

- 1) 岡沢祥訓、北真佐美、諏訪祐一郎(1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究, 第 16 巻 2 号, pp. 145-155
- 2) 河村明和(2016) 部活動に参加する生徒たちの部活動満足度の要因の検討 一年間の関与的観察を通して 教育カウンセリング研究, 第 7 巻 1 号, pp. 11-21
- 3) 小林熏、柘幸伸(2018) 大学生における運動有能感の高低と運動習慣及び健康関連指標に関する調査, 理学療法化学, 第 33 巻 1 号, pp. 55-58